

## 対人問題の困難さと重要な他者に対する役割期待のずれ、 精神状態との関連<sup>1)</sup>

鈴木康之郎\*<sup>1</sup>・能渡真澄\*<sup>2</sup>・田中 圭\*<sup>3</sup>・沢宮容子\*<sup>4</sup>

The Relationship among Interpersonal Problems, the Discrepancy between Expectation and Fulfillment of the Role Behaviors from a Significant Other, and Mental States

Koshiro SUZUKI\*<sup>1</sup>, Masumi NOTO\*<sup>2</sup>, Kei TANAKA\*<sup>3</sup> and Yoko SAWAMIYA\*<sup>4</sup>

In this study, the relationship among interpersonal problems, the discrepancy between expectation and fulfillment of the role behaviors from a significant other, and mental states was examined. In Study 1, we conducted a multiple regression analysis and investigated the relationship between interpersonal problems and mental states including depression, social interaction anxiety, and fear of negative evaluation. The results indicated that five subscales of interpersonal problems, namely, vindictive, cold, socially avoidant, nonassertive, and intrusive were related to mental states. In Study 2, we focused on the discrepancy between expectation and fulfillment of the role behaviors from a significant other. In order to investigate the relationship among the discrepancy between expectation and fulfillment, interpersonal problems, and mental states, we conducted a covariance structural analysis. The results revealed that the discrepancy between expectation and fulfillment were related to mental states indirectly through interpersonal problems. Specifically, the discrepancy between expectation and fulfillment about supportive behaviors was related to mental states indirectly through interpersonal problems.

**key words:** interpersonal problem, significant other, discrepancy between expectation and fulfillment, depression, social interaction anxiety

---

<sup>1)</sup> 本研究は2018年度筑波大学人間学群心理学類卒業論文として提出したものを再分析・加筆修正したものである。

\*<sup>1</sup> パーソルチャレンジ株式会社

PERSOL CHALLENGE Co., Ltd., Morinaga-puraza Bldg., Honkan 18-20F, 5-33-1 Shiba, Minato-ku, Tokyo 108-0014, Japan.

\*<sup>2</sup> 筑波大学大学院人間総合科学研究科

Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba, 1-1-1 Tennodai, Tsukuba, Ibaraki 305-8572, Japan.

\*<sup>3</sup> 筑波大学学生部

Department of Student Affairs, University of Tsukuba, 1-1-1 Tennodai, Tsukuba, Ibaraki 305-8577, Japan.

\*<sup>4</sup> 筑波大学人間系

Faculty of Human Sciences, University of Tsukuba, 1-1-1 Tennodai, Tsukuba, Ibaraki 305-8572, Japan.

## 問題と目的

ネガティブなライフイベントは、精神状態を左右する大きな要因となる。特に、他者が関わるネガティブなライフイベントが精神状態に及ぼす影響は大きく、家庭内の問題、夫婦間の不和、身近な人との別れといったライフイベントは、うつ病と少なからぬ関連を持っていることが明らかになっている (Kendler, Karkowski, & Prescott, 1999)。また、Sullivan (1953) は、人は他者との関わりの中で社会生活を営んでおり、他者との関わりがその人の感情や精神状態に大きく影響すると指摘している。高比良 (1998) は、対人領域と達成領域を区別したライフイベントのうち、特に対人領域のネガティブなライフイベントが抑うつに影響することを報告しており、対人関係が精神状態に及ぼす影響は大きいと考えられる。

Horowitz, Alden, Wiggins, & Pincus (2000) は、対人関係の中でも日常生活で生じる対人場面での問題によって個人が感じる困難さ(以下、対人問題の困難さ)に着目している。対人問題の困難さは、対人関係上で生じる問題について行動の抑制を表す「～することが難しい(hard to do) (例：周りの人に対して親しみをもてない)」、過剰な行動を表す「～しすぎる(do too much) (例：思い通りに人を支配しようとしすぎる)」といった困難さを捉える概念である (Horowitz et al., 2000)。対人問題の困難さが高まると、個人の苦痛につながり、対人関係において個人が適応的に機能することを妨げるとされている (Horowitz et al., 2000)。海外では、対人問題の困難さは抑うつ (Erickson et al., 2016)、社交不安 (Erickson et al., 2016)、評価懸念 (Gilbert, 2000) など、さまざまな精神状態との関連が検討されている。一方、本邦では、対人関係に関する研究は少なくないが、それらは対人関係に対する認知や態度に関する研究 (新井・弘中・近藤, 2015; 楢本・山崎, 2008; 松尾・新井, 1998; 村中・山川・坂本, 2019) や対人関係とパーソナリティの関連を検討した研究 (川崎・小玉, 2007) が大半であり、対人問題の困難さに焦点を当てた研究は少ない。白砂・平井 (2005) は、臨床現場においてはクライアントの抱える対人関係上の悩みに焦点を当てることの重要性を指摘しており、対人問題の困難さの増大と精神状態との関係を検討すること

は、臨床的研究として意義があると考えられる。

一方、対人問題の困難さの増大に影響を及ぼす要因として、重要な他者との関係の困難さが挙げられる。永田・岡本 (2005) は、家族や親友、恋人など重要な他者 (significant others) との関係における葛藤や危機の経験を通して、重要な他者との関係やそこで起こる事象が自分自身にとって意味のあることとして主体的に位置づけられ、他の人間関係一般にも反映されると指摘している。また、安部・川人・大塚 (2014) は、他者に対して過度にしつこく確認を求める再確認傾向に着目し、重要な他者に対する再確認傾向が対人ストレスイベントを媒介し、抑うつに影響することを報告している。したがって、重要な他者との関係の困難さは周囲の他者との対人関係、さらには精神状態に影響していると考えられる。

重要な他者との関係の困難さに着目した心理療法として、対人関係療法 (Interpersonal Psychotherapy; 以下 IPT) がある。IPT は、うつ病に対する治療法として開発された、エビデンスに基づく心理療法であるが (Weissman, Markowitz, & Klerman, 2000 水島訳 2007)、うつ病だけでなく、摂食障害、社交不安障害などに対しても効果が示されている (Agras et al., 2000; Borge et al., 2008; Lipsitz et al., 2008; Weissman et al., 1979)。IPT では、重要な他者との関係の困難さが対人関係上のストレスや精神状態の悪化につながると考え、重要な他者との関係の改善やソーシャル・サポートの強化などを図ることで症状の改善を目指す (Lipsitz & Markowitz, 2013)。IPT では、その介入の一つとして重要な他者との役割期待のずれに焦点を当てる (Lipsitz & Markowitz, 2013)。安部他 (2014) で取り上げられている再確認傾向は重要な他者に向けられる個人の動機づけや行動であるが、役割期待のずれは重要な他者との間の期待と遂行のずれを扱うため、重要な他者との関係の困難さにより密接にかかわる指標であると考えられる。そこで本研究では、重要な他者との関係の中で生じる役割期待のずれに着目する。なお、IPT では患者と重要な他者との相互的な役割期待のずれを扱うが、本研究では個人が感じているずれに焦点を当てるために、重要な他者に対する期待と実際の重要な他者の遂行とのずれに着目する。

下斗米 (2000) は、相手に対してどの程度期待しているかという役割行動期待度と、実際に相手がどの

程度その行動を遂行しているかという役割行動遂行度を測定し、2つの差得点を役割期待のずれとして算出している。この役割期待のずれは精神的健康や抑うつと関連することが指摘されている(金政, 2008; 渡辺・佐藤, 2017)。役割期待のずれには、相手の行動が期待以下の場合(期待度>遂行度)と期待以上の場合(期待度<遂行度)があり、両者は同じ役割期待のずれであっても質的に異なるずれを表している。すなわち、相手の行動が期待以下の場合と期待以上の場合では相手との関係性の満足度に差があるというのである(下斗米, 2000)。これまでの役割期待のずれに関する研究では、差得点のみ、あるいはずれの方向性だけに焦点を当てた検討がなされているが(亀山・坂本・岡, 2008; Knobloch-Fedders, Critchfield, & Staab, 2017; 下斗米, 2000; 渡辺・佐藤, 2017), このような方法では、得られた結果がずれの大きさによるものか、あるいは、期待以下、期待以上を表すずれの方向性によるものかを区別することができていない。そこで、差得点の絶対値によるずれの大きさと差得点の正負によるずれの方向性(期待以下, 期待以上)の2つの観点から検討を行うことが必要である。

以上より、研究1では、精神状態に影響を及ぼす要因の一つとして重要であると考えられる、対人問題の困難さに着目する。Horowitz et al.(2000)および白砂・平井(2005)は、対人問題の困難さには8つの下位領域があることを報告しており、各下位領域に着目した検討が必要である。対人問題の困難さはIPTの効果研究で取り上げられている重要な概念であることから(Agras et al., 2000; Borge et al., 2008), IPTの効果を示されているうつ病、摂食障害、社交不安障害と深く関係する抑うつ、社交不安、評価懸念(Agras et al., 2000; Lipsitz et al., 2008; Weissman et al., 1979)との関連が予測される。海外では、これらの精神状態について対人問題の困難さとの関連が検討されているが、8つの下位領域に着目した検討は行われていない(Erickson et al., 2016; Gilbert, 2000)。そこで、研究1では対人問題の困難さの8つの下位領域と抑うつ、社交不安、評価懸念の3つの精神状態との関連を詳細に検討することを目的とする。

次に、研究2では、対人問題の困難さにつながる要因の一つとして考えられる重要な他者に対する役割

期待のずれに着目し、重要な他者に対する役割期待のずれが対人問題の困難さおよび精神状態に及ぼす影響を検討することを目的とする。安部他(2014)およびLipsitz & Markowitz (2013)に基づき、役割期待のずれが精神状態に影響する、あるいは対人問題の困難さを媒介して精神状態に影響するモデルを仮定し検討を行う。また、IPTではソーシャル・サポートの強化や重要な他者との関係の改善を図るために、重要な他者との役割期待のずれに着目している。これまでのソーシャル・サポート研究で重要とされてきた要素は以下の通りである。嶋(1991)は心理的サポート、娯楽関連のサポート、道具的・手段的サポート、問題解決志向的サポートの4つの機能から重要性を述べている。また、福岡・橋本(1997)は情緒的サポートと手段的サポートの2つの知覚されたサポート行動から重要性を述べている。重要な他者との関係については、勝谷・坂本(2017)は重要な他者との間で経験される「ほめられた」、「助けてもらった」、「約束を破られた」、「批判されたり、からかわれたりした」という出来事に着目している。そこで本研究では、これらの先行研究を概観し、対人問題の困難さや精神状態に影響する重要な他者との関係として、支援や援助、共行動、決まり事の遵守、娯楽的関わりが重要であると考え、下斗米(2000)の6つの役割期待のずれのうち支援性、近接性、自律性、娯楽性に関する役割期待のずれを測定する。福岡・橋本(1995)が、ソーシャル・サポートの内容による精神的健康への効果の違いを報告していることから、本研究では、各役割期待のずれが対人問題の困難さおよび精神状態に及ぼす影響を検討する。また、役割期待のずれは、相手の行動が期待以下であるずれと期待以上であるずれが質的に異なることを考慮し、ずれの大きさ(絶対値)、ずれの方向性(期待以下、期待以上)という2つの観点から分析を行う。重要な他者については、幼児期では両親(特に母親)、児童期では友人との関係性が強まっていき、青年期では徐々に友人関係が親との関係と同等かそれ以上の重要な関係へと発展していくという発達の変遷が指摘されている(Sullivan, 1953)。そこで本研究では、青年期を対象とし、重要な他者として同性友人、異性友人、恋人の3つの関係性を想定する。

Table 1 各変数の記述統計量および各変数間の相関

	$\alpha$	M	SD	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
1 IIP-62J	.79	1.40	0.50	-										
2 支配	.80	1.54	0.56	.71***	-									
3 報復	.81	1.69	0.68	.57***	.76***	-								
4 冷淡	.88	1.90	0.77	.52***	.70***	.83***	-							
5 回避	.88	2.12	0.83	.40***	.56***	.67***	.81***	-						
6 服従	.81	1.90	0.69	.39***	.49***	.54***	.62***	.77***	-					
7 従順	.84	1.73	0.68	.47***	.47***	.47***	.56***	.64***	.83***	-				
8 献身	.82	1.64	0.65	.61***	.51***	.39***	.39***	.44***	.61***	.71***	-			
9 介入	.88	11.15	8.73	.41***	.54***	.57***	.58***	.52***	.46***	.40***	.34***	-		
10 BDI (抑うつ)	.91	31.33	15.19	.42***	.59***	.66***	.78***	.71***	.52***	.47***	.31***	.61***	-	
11 SIAS (社交不安)	.93	40.69	10.77	.31***	.38***	.32***	.48***	.49***	.43***	.37***	.35***	.43***	.58***	-
12 FNE (評価懸念)														

\*\*\* $p < .001$

### 研究 1

研究1では、対人問題の困難さと抑うつ、社交不安、評価懸念の3つの精神状態との関連を詳細に検討することを目的とする。

#### 方法

**調査対象** 大学生および大学院生318名(男性

147名、女性171名、平均年齢19.69歳、 $SD=3.96$ )を対象に質問紙調査を実施した。分析対象とする年齢範囲を研究2と統一するため、下斗米(2000)にならない、18から25歳までを調査対象とした上で、回答に欠損がみられた回答者を除外し、291名(男性134名、女性157名、平均年齢19.22歳、 $SD=1.37$ )を分析対象とした。

**調査時期** 2018年5月から6月に実施した。

**質問紙構成** 1. フェイスシート 所属、年齢、性別について記入を求めた。

2. 対人問題の困難さ Inventory of interpersonal problems-64 (Horowitz et al., 2000) の日本語版である対人問題インベントリー(以下IIP-62J; 白砂・平井, 2005)を用いた。IIP-62Jは日常生活で生じる対人場面での問題に対する困難さの程度を測定する尺度であり、計62項目から構成される。下位尺度は8つあり、「人に対して非常に攻撃的だ」「思い通りに人を支配しようとし過ぎる」といった支配(7項目)、「人を信頼できない」「仕返ししたいという気持ちが強すぎる」といった報復(8項目)、「周りの人と上手くやることが苦手だ」「周りの人に親しみをもてない」といった冷淡(7項目)、「仲良くしてほしいと自分から言えない」「人前で非常に決まりの悪い思いをする」といった回避(8項目)、「嫌なことをされてもやめて欲しいと言えない」「言いたいことをはっきりと言うことができない」といった服従(8項目)、「人から簡単に説得されてしまう」「周りの人に自分をいいように使われてしまう」といった従順(8項目)、「人を喜ばせようとしすぎる」「自分よりも人の欲求を優先させてしまう」といった献身(8項目)、「他人事に首を突っ込んでしまう」「人に注目されたいという気持ちが強すぎる」といった介入(8項目)から構成されている。「1. 全く困っていない」から「5. 非常に困っている」の5件法で回答を求めた。

3. 抑うつ Beck Depression Inventory (Beck, Rush, Shaw, & Emery, 1979) の日本語版(以下BDI; 林・瀧本, 1991)を用いた。21項目から構成され、最近1週間における抑うつの状態の重症度を測定した。0から3の4件法で、各項目には得点が高いほど抑うつ症状が強くなるよう構成された4つの選択肢があり、その中から最近の状態として最も当てはまるものに回答を求めた。

4. 社交不安 Social Interaction Anxiety Scale

Table 2 対人問題の困難さの精神状態に対する重回帰分析

		BDI (抑うつ)	SIAS (社交不安)	FNE (評価懸念)
IIP-62J	支配	.02	-.00	.04
	報復	.19*	.12	.11
	冷淡	.15	-.02	-.39***
	回避	.20	.53***	.47***
	服従	.07	.29***	.22*
	従順	.12	-.09	.13
	献身	-.04	.04	-.15
	介入	.01	-.05	.17*
調整済み R <sup>2</sup>		.38***	.63***	.31***

\* $p < .05$ , \*\*\* $p < .001$ 

(Mattick & Clarke, 1998) の日本語版 (以下 SIAS ; 金井他, 2004) を用いた。20 項目から構成され、人との会話や付き合いのような他者と交流する状況に対する恐怖について、「0. まったくあてはまらない」から「4. 非常にあてはまる」の 5 件法で回答を求めた。

5. 評価懸念 Fear of Negative Evaluation Scale (Watson & Friend, 1969) の日本語短縮版 (以下 FNE ; 笹川他, 2004) を用いた。12 項目から構成される。他者からの否定的な評価に対する恐れについて「1. 全くあてはまらない」から「5. 非常にあてはまる」の 5 件法で回答を求めた。

### 結果と考察

**記述統計量および相関係数** 各変数の記述統計量、信頼性係数および各変数間の相関を Table 1 に示した。対人問題の困難さについては各下位尺度で項目数が異なるため各下位尺度の平均値を、精神状態については合計得点を算出した。相関については、全ての変数間で 0.1% 水準で有意な相関がみられた。

**対人問題の困難さと精神状態との関連** 対人問題の困難さと精神状態との関連を検討するために重回帰分析 (強制投入法) を行った。独立変数を IIP-62 J (対人問題の困難さ) の 8 つの下位尺度とし、基準変数を BDI (抑うつ)、SIAS (社交不安)、FNE (評価懸念) のそれぞれとして分析を行った。標準回帰係数 ( $\beta$ ) および調整済み  $R^2$  を Table 2 に示した。調整済み  $R^2$  はすべての分析において、有意確率 0.1% で有意であった。

抑うつに関しては、報復との有意な正の関連が認められた ( $\beta = .19$ ,  $p < .05$ )。先行研究では、Erickson et al. (2016) が、対人問題の困難さについて「支配性

(他者を動かし支配しようとする傾向)」と「親密性 (人と心理的距離が近くすぐ親しくなろうとする傾向)」という 2 つの要素から検討を行っている。「支配性」は本研究における支配と正の相関、服従と負の相関が想定され、「親密性」は本研究における献身と正の相関、冷淡と負の相関が想定される要素であるが、Erickson et al. (2016) では、「支配性」、「親密性」のどちらも抑うつとは関連が認められていない。一方、本研究では、報復が抑うつと関連することが認められたことから、報復に関する対人問題の困難さが抑うつを高める要因の一つであることが考えられる。報復は、他者に対して報復的、自己中心的、猜疑的で他者を信頼できないといったことへの困難を示す。報復の類似概念として敵意が挙げられるが、楳本・山崎 (2008) は、敵意の高い人は他者に対して不信や猜疑心を抱き、否定的な態度をもつ傾向から、対人関係で強いストレスを経験し抑うつにつながると指摘している。同様に、対人場面において報復に関する困難を感じている人は強いストレスを経験し、抑うつが高くなることが考えられる。

社交不安に関しては、回避および服従との有意な正の関連が認められた (順に  $\beta = .53$ ,  $p < .001$ ;  $\beta = .29$ ,  $p < .001$ )。回避および服従に関する対人問題の困難さを抱えている人は、自己主張が苦手であり、加えて、対人関係の構築あるいは対人関係は築けても自信をもって振る舞うことが苦手であるという特徴が挙げられる。「対人的場面において適切な社会的行動を遂行することが、どの程度自分に可能かについての主観的な評価」は対人的自己効力感と定義される (松尾・新井, 1998)。対人的自己効力感の低い人は社会的場面における恐怖感および不安感が高いこ

とが示されている(新井他, 2015)。したがって、対人関係の構築や維持、自己主張に対して感じている困難さにより、適切な社会的行動を遂行できるという自己評価が低くなり、その結果、社交不安が高まると考えられる。なお、Erickson et al.(2016)では、社交不安は対人問題の困難さの「支配性」と「親密性」の両方と負の関連があることが報告されているが、本研究では、「親密性」に対応する献身や冷淡とは関連が認められなかった。この結果は、本研究で測定した社交不安は、人との会話や付き合いのような対人交流に対する不安であり、親密な関係を築くこと自体に対する不安ではないことから、献身や冷淡とは関連しなかったと考えられる。今後、社交不安と対人問題の困難さとの関連については、様々な社会的場面を取り上げた場面想定法などを用い、さらなる検討が必要であろう。

評価懸念に関しては、冷淡との有意な負の関連( $\beta = -.39, p < .001$ )、回避、服従、介入との有意な正の関連(順に  $\beta = .47, p < .001$ ;  $\beta = .22, p < .05$ ;  $\beta = .17, p < .05$ )が認められた。Gilbert (2000)は、服従的な行動が評価懸念と関連することを示しているが、本研究では、服従だけでなく冷淡、回避、介入に関する対人問題の困難さが評価懸念と関連することが認められた。冷淡は、対人関係の維持が困難、あるいは他者に対して親しみや愛情を感じられないといった困難を感じていることを示す。このような困難を感じる人は、他者との親密さを求める動機はあるがそれが満たされないために困難を感じていると考えられる。川崎・小玉(2007)は、人と接することの楽しさや満足感を求める動機が高いと他人が自分をどのように思っているのかという不安が低下することを報告している。本研究では、他者との親密さを求める動機が満たされていない場合においても他者からの評価への不安が低下することが示唆された。また、回避および服従は、対人関係の構築、自己主張などに困難を感じていることを示す。対人的自己効力感について、松尾・新井(1998)は、児童期において対人的自己効力感が低いと否定的評価懸念が高くなることを見出している。本研究では、児童期だけでなく、青年期においても、対人関係の構築や自己主張の困難さが評価懸念につながることを示された。介入との正の関連については、承認欲求が評価懸念と関連することが示されており(山本・田上, 2007)、他者から

の承認欲求が高いことで、他人事に首を突っ込んでしまう、人に注目されたいという気持ちが強すぎるといった困難を感じ、評価懸念が高まると考えられる。

以上より、日常場面で個人が感じる対人問題の困難さと精神状態との関連が明らかになった。精神状態との関連が認められた対人問題の困難さの背景にはパーソナリティや対人特性の影響が考えられるが、対人問題の困難さに着目することは、精神状態の改善のための糸口になることが示唆された。

## 研究 2

研究2では、対人問題の困難さにつながる要因の一つとして考えられる重要な他者に対する役割期待のずれに着目し、重要な他者に対する役割期待のずれが対人問題の困難さおよび精神状態に及ぼす影響について検討することを目的とする。

### 方法

**調査対象** 大学生および大学院生 537 名(男性 222 名、女性 315 名、平均年齢 19.82 歳、 $SD=2.12$ )を対象に質問紙調査を実施した。また、年齢範囲については下斗米(2000)にならい、18 から 25 歳とし、重要な他者の重要度が 3 以上の回答から欠損値のある回答者を除外し、394 名(男性 156 名、女性 238 名、平均年齢 19.71 歳、 $SD=1.21$ )を分析対象とした。

**調査時期** 2018 年 10 月から 2019 年 4 月に実施した。

**質問紙構成** 1. フェイスシート 所属、年齢、性別の記入を求めた。

2. 重要な他者の想定 “同性友人、異性友人、恋人のうち、あなたにとって重要な他者を 1 名思い浮かべてください。”という教示文を提示し、回答者に重要な他者 1 名を想定してもらった。「重要な他者」の説明については、水島(2009)に基づき、“重要な他者とは、自分に関係が近く、影響力のある人のことを指します。『重要な他者』との親しい関係は、人間の心の健康を守るために大きな役割を果たしています。”という説明文を提示した。その後、想定した重要な他者の性別、年齢を記入してもらい、交際期間と年月週単位のいずれかによる接触頻度の回答を求めた。これらの質問の設定理由は、下斗米(2000)にならい、想定された人物像を明確に意識してもらうことを意図したことによる。なお本研究では、安部

Table 3 各変数の記述統計量

		$\alpha$	$M$	$SD$
支援性	期待度	.89	2.28	1.22
	遂行度	.89	2.47	1.14
	ずれ	.72	0.19	0.87
近接性	期待度	.79	2.28	1.43
	遂行度	.81	2.05	1.72
	ずれ	.75	-0.22	1.40
自律性	期待度	.81	1.19	1.53
	遂行度	.79	1.73	1.43
	ずれ	.73	0.54	1.54
娯楽性	期待度	.85	1.43	1.65
	遂行度	.85	2.11	1.43
	ずれ	.71	0.68	1.28
IIP-62J	報復	.82	1.59	0.62
	冷淡	.84	1.80	0.79
	回避	.85	2.08	0.87
	服従	.87	2.30	0.88
	介入	.80	1.60	0.61
BDI (抑うつ)		.88	10.96	8.63
SIAS (社交不安)		.91	33.56	15.29
FNE (評価懸念)		.94	36.83	11.10

他 (2014) および勝谷・坂本 (2017) に基づき、重要な他者との関係性(同性友人, 異性友人, 恋人)を区別せずに検討を行った。最後に、想定した重要な他者の重要度を「-4. 全く重要ではない」から「+4. 極めて重要である」の両極 9 件法で回答を求めた。

3. 役割行動期待度 想定した重要な他者に対する役割行動期待度を測定するために、役割行動期待尺度(下斗米, 2000)を用いた。この尺度は、支援性、近接性、自律性、娯楽性、類似性、力動性の 6 つの因子を測定する 34 項目から構成される。そのうち本研究では、「苦しい立場の時、味方になってくれる」「いつでも相談に応じる」といった支援性 (10 項目)、「お互いの家に行き合う」「買い物やスポーツなど一緒に出かける」といった近接性 (4 項目)、「自分の言動に責任をもつ」「自分勝手な振る舞いを慎む」といった自律性 (5 項目)、「シヤレなどで相手を楽しませる」「相手を愉快的気分にするように努める」といった娯楽性 (5 項目) の 4 つの下位尺度、計 24 項目を用いて検討した。なお、これら 4 つの役割期待は同性友人、異性友人、恋人に対して共通して抱くことが指摘されている(高坂, 2010)。“現在のその人との付き合い方から考えて、あなたはその人に対して、以下に挙げる行動をどの程度あなた自身に行ってほしいとお思になりますか。”という質問文を提示の

上、各項目について「-4. 全く期待しない」から「+4. 極めて期待する」までの両極 9 件法で回答を求めた。

4. 役割行動遂行度 想定した重要な他者の役割行動遂行度を測定するために、役割行動期待度と同様に役割行動期待尺度(下斗米, 2000)のうち支援性、近接性、自律性、娯楽性の 4 つの下位尺度を用いた。“現在のその人との付き合い方から考えて、その人は、以下に挙げる行動をどの程度あなた自身に行っているとお思になりますか。”という質問文を提示の上、各項目について「-4. 全く行っていない」から「+4. 極めて行っている」までの両極 9 件法で回答を求めた。

5. 対人問題の困難さ 研究 1 と同様に IIP-62J(白砂・平井, 2005)を用いた。62 項目のうち、研究 1 における重回帰分析で有意な結果がみられた報復、冷淡、回避、服従、介入の 5 つの下位尺度、計 39 項目を使用した。

6. 精神状態 研究 1 と同様に、抑うつは BDI(林・瀧本, 1991)、社交不安は SIAS(金井他, 2004)、評価懸念は FNE(笹川他, 2004)を用いて測定した。

## 結果と考察

**記述統計量、相関係数および得点化** 各変数の記述統計量を Table 3 に示した。研究 1 と同様に対人問題の困難さは平均値を、精神状態は合計得点を算出した。役割期待のずれに関しては、重要な他者に対する役割期待のずれ得点を算出するために、下斗米 (2000) にならひ、項目ごとに役割行動遂行度得点から役割期待度得点を減じた得点をずれ得点とした。期待度、遂行度、ずれ得点のいずれも各下位尺度の平均値を算出した。また、各変数間の相関を Table 4 に示した。

その後、得られたずれ得点から、ずれの大きさとずれの方向性を区別するために以下の得点化を行った。ずれの大きさについては、ずれ得点の絶対値を中心化した値をずれの大きさ得点とした。また、ずれの方向性については、Kraemer & Blasey (2004) に基づき、ずれ得点が正である場合に +0.5、負である場合に -0.5 とした二値変数を算出し、これをずれの方向性得点とした。値が負である場合は相手の行動が期待以下、正である場合は相手の行動が期待以上であることを表す。

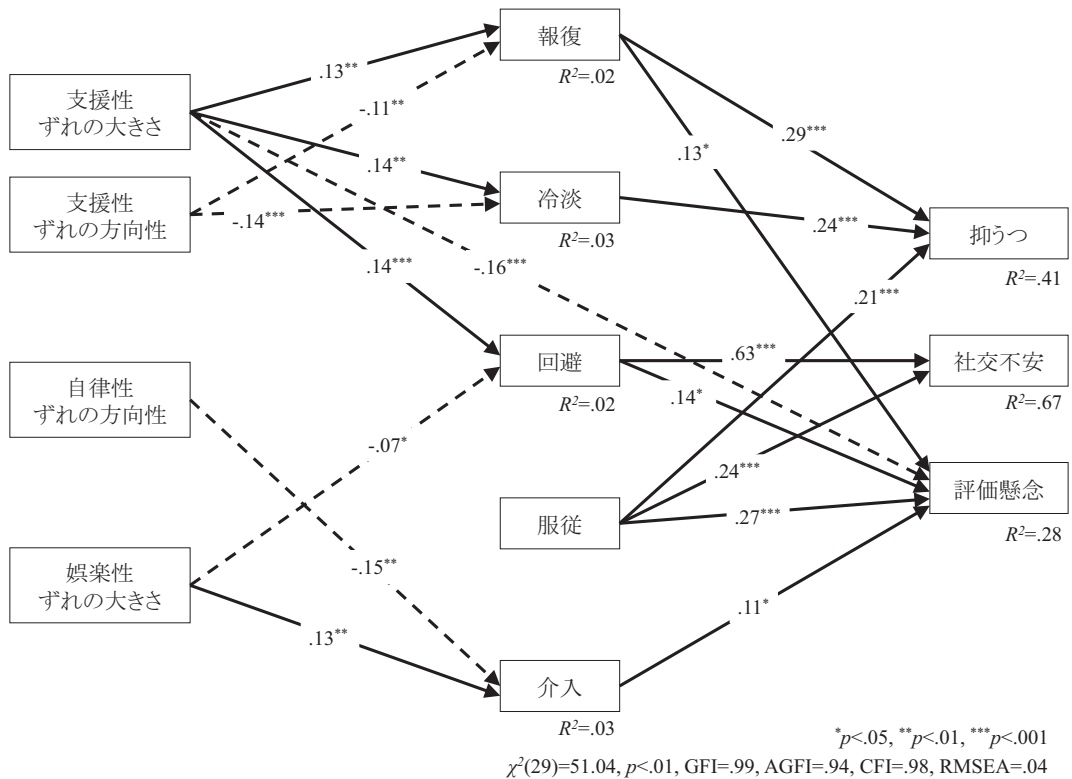
**役割期待のずれが対人問題の困難さおよび精神状**

Table 4 各変数間の相関

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	
期待度																				
1 支援性																				
2 近接性	.51***																			
3 自律性	.61***	.37***																		
4 娛樂性	.59***	.51***	.66***																	
遂行度																				
5 支援性	.73***	.44***	.38***	.38***																
6 近接性	.31***	.62***	.24***	.31***	.46***															
7 自律性	.46***	.23***	.46***	.36***	.53***	.14**														
8 娛樂性	.43***	.47***	.37***	.66***	.54***	.39***	.44***													
ずれ																				
9 支援性	-.45***	-.14**	-.37***	-.33***	.29***	.17**	.04	.10*												
10 近接性	-.14**	-.26***	-.08	-.14**	.11*	.60***	-.06	.00	.35***											
11 自律性	-.18***	-.15**	-.57***	-.31***	.12*	-.11*	.47***	.04	.41***	.03										
12 娛樂性	-.29***	-.13**	-.42***	-.55***	.11*	.04	.03	.26***	.54***	.18***	.44***									
IIP-62J																				
13 報復	-.07	-.01	.00	.01	-.10*	-.06	-.06	-.03	-.04	-.07	-.06	-.04								
14 冷淡	-.07	-.07	-.03	-.04	-.11*	-.13**	-.01	-.01	-.04	-.09	.02	.03	.72***							
15 回避	-.08	-.02	-.05	-.02	-.06	-.05	-.01	.03	.03	-.04	.04	.06	.65***	.78***						
16 服従	.07	.01	.01	.02	-.01	-.08	.05	.07	-.11*	-.10	.03	.05	.49***	.58***	.70***					
17 介入	.10*	.10*	.04	.02	.06	.06	-.03	.06	-.07	-.04	-.06	.04	.40***	.31***	.28***	.35***				
18 BDI (抑うつ)	-.02	-.05	-.03	-.04	-.05	-.07	-.06	-.02	-.04	-.04	-.03	.04	.57***	.58***	.56***	.49***	.32***			
19 SIAS (社交不安)	-.04	-.03	-.03	-.02	-.06	-.04	.02	.02	-.02	-.02	.05	.04	.52***	.66***	.80***	.68***	.26***	.56***		
20 FNE (評価懸念)	.20***	.09	.06	.10*	.08	-.01	.05	.08	-.17**	-.10*	-.01	-.04	.38***	.35***	.43***	.46***	.29***	.40***	.51***	

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$





**Figure 1** 役割期待のずれが対人問題の困難さおよび精神状態に及ぼす影響  
 注) 実線は正のパス、破線は負のパスを示す。図の煩雑化を避けるために、誤差、共分散は省略した。

**態に及ぼす影響** 役割期待のずれ(ずれの大きさ, ずれの方向性, それらの交互作用)が精神状態に影響する。あるいは対人問題の困難さを媒介して精神状態に影響するモデルについて検討するため、共分散構造分析を行った。役割期待のずれの大きさ, ずれの方向性, それらの交互作用項の間と、対人問題の困難さ変数の誤差項の間、および、精神状態変数の誤差項の間に、それぞれ共分散を仮定した。多重共線性については、4つの役割期待のずれを独立変数に同時に入れて重回帰分析を行った結果、VIFが1.42から4.67であり、10を超えていないことから(小塩, 2011)、多重共線性の問題は無いと判断した。その後、5%水準で有意でないパスを削除してモデルを修正し、再分析を行った。その結果、適合度は良好な値であった。最終的なモデルをFigure 1に示した。また、間接効果の有意性を検討するために、リサンプリング数を5,000回に設定したブートストラップ法(Preacher & Hayes, 2008)を用い、バイアス修正済み95%信頼区間を算出した(Table 5)。その結果、

役割期待のずれから対人問題の困難さを媒介して抑うつおよび社交不安に影響する経路では、有意な間接効果が認められた。一方で、役割期待のずれから対人問題の困難さを媒介して評価懸念に影響する経路では、有意な間接効果は認められなかった。

支援性に関しては、ずれの大きさが大きいほど、報復、冷淡、回避に関する対人問題の困難さが高まり、報復と冷淡は抑うつを、回避は社交不安を高める経路が有意であった。また、ずれの方向性が負である、つまり、重要な他者の行動が期待以下の場合に報復、冷淡に関する対人問題の困難さが高まり、さらに抑うつを高める経路が有意であった。これらのことから、重要な他者の支援的な行動に対する役割期待のずれの大きさおよび方向性が対人問題の困難さを媒介して抑うつおよび社交不安に影響することが示された。特に報復および冷淡は、ずれの大きさとずれの方向性の両方が関連したことから、期待しているよりも重要な他者が支援的な行動をとっていない場合に高まるが、期待を大きく上回る支援的な行動を

Table 5 役割期待のずれから精神状態への間接効果

	B	SE	BC95%CI	
			下限値	上限値
<b>抑うつ</b>				
支援性ずれの大きさ→報復→抑うつ	0.52**	0.20	0.13	0.90
支援性ずれの方向性→報復→抑うつ	-0.53*	0.22	-0.95	-0.11
支援性ずれの大きさ→冷淡→抑うつ	0.47**	0.18	0.12	0.81
支援性ずれの方向性→冷淡→抑うつ	-0.58**	0.19	-0.96	-0.20
<b>社交不安</b>				
支援性ずれの大きさ→回避→社交不安	2.10***	0.60	0.93	3.26
娯楽性ずれの大きさ→回避→社交不安	-0.68*	0.29	-1.24	-0.12
<b>評価懸念</b>				
支援性ずれの大きさ→報復→評価懸念	0.29	0.16	-0.02	0.61
支援性ずれの方向性→報復→評価懸念	-0.30	0.17	-0.64	0.03
支援性ずれの大きさ→回避→評価懸念	0.34	0.19	-0.04	0.72
自律性ずれの方向性→介入→評価懸念	-0.37	0.19	-0.74	0.01
娯楽性ずれの大きさ→回避→評価懸念	-0.11	0.07	-0.25	0.03
娯楽性ずれの大きさ→介入→評価懸念	0.15	0.08	-0.02	0.31

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$

とっている場合にも高まること示された。報復や冷淡は、攻撃的・非協力的な行動をとったり、他者に同情したり親身に接する行動ができないといった、自己を優先する行動が特徴である。自己優先志向は対人ストレスイベントを媒介して抑うつに影響することが示されている(村中他, 2019)。自分の思い通りにしたいという思いが強く、重要な他者の支援的行動が期待以下、あるいは期待とは大きくずれている人は、周囲の人との関係においても困難が生じ、抑うつが悪化すると考えられる。一方で、回避は、ずれの方向性にかかわらず、ずれが大きくなる場合に高まり、社交不安に影響することが示された。これは、重要な他者からの支援的行動が期待通りではない人は、対人関係の構築や自己主張が苦手といった困難を感じ、対人交流に対する不安が高まることを示す。重要な他者から期待通りの支援を得るためには、自分の求める支援の内容を相手に伝えなければならない。しかし、重要な他者にそれを伝えられていないことでずれが大きくなり、さらには周囲の他者に対しても自己主張ができず対人関係の構築に困難を感じていると考えられる。これらの支援性に関する結果は、重要な他者との支援的な関係が対人問題の困難さに反映され、さらに自身の精神状態に影響するということを示しており、亀山他(2008)や永田・岡本

(2005)の知見を支持するとともに、重要な他者との間に期待通りの支援的な関係を構築することが対人問題の困難さの軽減、さらには精神状態の安定につながることを示唆された。

近接性に関しては、ずれの大きさ、ずれの方向性、ずれの交互作用のいずれも有意な結果は得られなかった。この結果は、重要な他者に対する役割期待のずれのうち、どのような内容の役割期待のずれが対人問題の困難さや精神状態に影響するのかを示していると考えられる。近接性は重要な他者と直接的に関わるような共行動を表している。一方で、有意な結果が得られた支援性や娯楽性では、重要な他者に対して支援的行動や場を和ませようとする行動を求めていることが考えられる。つまり、単なる共行動ではなく、支援的行動や場を和ませようとする行動に関する役割期待のずれが生じる場合に対人問題の困難さや精神状態に影響することが示唆された。

自律性に関しては、ずれの方向性が負である、つまり、重要な他者の自律的な行動が期待以下の場合に介入に関する対人問題の困難さが高まること示された。重要な他者の自律的な行動が期待以下の人、期待しているよりも重要な他者が決まり事やルールを守ってくれていない状態にあり、重要な他者から認められているという感覚が十分に得られていない

と推測される。そのため、その感覚を補おうとするあまりに、対人関係において他人事に首を突っ込むなど過度に介入してしまうことが考えられる。

娯楽性に関しては、ずれの大きさが大きくなるほど介入に関する対人問題の困難さが高まることが示された。一方で、ずれの大きさが大きくなるほど回避に関する対人問題の困難さが低下し、さらに社交不安が低下する経路が有意であった。介入はすぐにおどけ役になってしまう、他人事に首を突っ込んでしまうといった困難を表す一方で、回避は対人関係の構築や自己主張が苦手といった困難を表し、対照的な困難さである。つまり、場を和ませようとする重要な他者の行動に対して役割期待のずれが大きいと、そのずれを補うために自分自身で場を和ませ相手を楽しませようとして、おどけ役になる、他人事に首を突っ込むといった行動が増えてしまい、介入に関する対人問題の困難さが高まると考えられる。その一方で、回避に関する対人問題の困難さは低下し、社交不安も低下すると推測される。

評価懸念に関しては、全ての経路について有意な間接効果が認められなかった。このことは、評価懸念という概念の持つ特徴によるものだと考えられる。評価懸念とは、他者からの否定的な評価に対する恐れを表す認知的特徴であり(笹川他, 2004)、抑うつや社交不安のように症状を表す概念とは質的に異なると考えられる。したがって、抑うつ、社交不安に関しては間接効果が有意であったことを踏まえると、重要な他者に対する役割期待のずれが対人問題の困難さを媒介して精神状態に及ぼす影響は、抑うつや社交不安のような症状に対しては大きい一方で、評価懸念のような認知的特徴に対しては小さいことが推測される。ただし、支援性のずれの大きさから評価懸念への負のパスは有意であり、支援的行動のずれが大きくなると評価懸念が低下することが示された。この結果の要因としては、重要な他者との関係性の中で評価を十分に受けており、他の周囲の人からの評価を必要としていない、あるいは、そもそも他者からの評価に関心がない、などが考えられる。しかしこの点については、本研究では明確にすることはできないため、今後さらに検討していく必要がある。

### 総合考察

本研究では、日常場面で個人が感じる様々な対人

問題の困難さを測定し、精神状態との関連について検討した。さらに、対人問題の困難さにつながる要因として役割期待のずれに着目し、重要な他者に対する役割期待のずれが対人問題の困難さおよび精神状態に及ぼす影響について検討した。以下では、その結果について総合的に考察する。研究1では、様々な対人問題の困難さが精神状態と関連することが示され、パーソナリティや対人特性だけでなく、対人問題の困難さに着目することの必要性が示唆された。研究2では、役割期待のずれのうち、特に重要な他者の支援的行動に関する役割期待のずれが対人問題の困難さを高め、さらに抑うつを高めることが示された。役割期待のずれをずれの大きさとずれの方向性から検討したことで、重要な他者からの支援を十分に受けることが重要なのではなく、期待通りの支援を受けることが重要であることが示唆された。また、重要な他者に対する役割期待のずれが精神状態に直接影響するのではなく、対人問題の困難さを媒介して精神状態に影響することが示された。ただし、精神状態のうち症状を表す抑うつや社交不安では間接効果が認められた一方で、認知的特徴を持つ評価懸念では間接効果は認められなかった。これらのことから、抑うつや社交不安といった症状に介入する上で、対人問題の困難さに着目することの重要性が示唆された。以上のことから、重要な他者との関係性の中で役割期待のずれを小さくしていく、あるいは、周囲の人との関わり方を省みて対人問題の困難さを軽減していくことで、抑うつや社交不安を改善していくことが可能であると考えられる。

今後の課題として、まず、研究1と研究2で分析方法が異なるため正確な比較はできないが、各精神状態に関連する対人問題に差異が認められた。この点については、今後さらに詳細に検討していく必要がある。さらに、本研究は横断的調査であったことから、重要な他者との役割期待のずれと対人問題の困難さおよび精神状態の関係について因果を十分に検討できていない。したがって、今後は縦断的な検討が必要である。次に、本研究における重要な他者に対する役割期待のずれが対人問題の困難さや精神状態に影響を及ぼすという結果は、IPTにおける4つの問題領域(悲哀、対人関係上の役割をめぐる不和、役割の変化、対人関係の欠如)のうち、対人関係上の役割をめぐる不和が対人問題の困難さや精神状態に影響

を及ぼす機序を示唆する内容であったと考えられる。しかし、他の3つの問題領域については実証的な研究が十分に積み重ねられていないため、今後は4つの問題領域の差異に着目して検討するなど発展的な研究が求められる。また、研究2では、重要な他者との関係性(同性友人、異性友人、恋人)を区別せずに検討を行ったが、今後は関係性の違いに着目し、3者間の差を検討することも重要な課題であると考えられる。最後に、研究2の重要な他者を想定する際の教示文が回答を歪めた可能性があり、今後の研究では教示の仕方について再検討する必要がある。

### 引用文献

- 安部主見・川人潤子・大塚泰正 (2014). 再確認傾向が対人ストレスイベント及び精神的健康に及ぼす影響 パーソナリティ研究, **23**, 29-37.
- Agras, S. W., Walsh, T. B., Fairburn, C. G., Wilson, T. G., & Kraemer, H. C. (2000). A Multicenter Comparison of Cognitive-Behavioral Therapy and Interpersonal Psychotherapy for Bulimia Nervosa. *Archives of General psychiatry*, **57**, 459-466.
- 新井博達・弘中由麻・近藤清美 (2015). 社交不安症状と対人的自己効力感が大学生のひきこもり親和性に与える影響 パーソナリティ研究, **24**, 1-14.
- Beck, A. T., Rush, A. J., Shaw, B. F., & Emery, G. (1979). *Cognitive therapy of depression*. New York: Guilford Press.
- Borge, F.-M., Hoffart, A., Sexton, H., Clark, D. M., Markowitz, J. C., & McManus, F. (2008). Residential cognitive therapy versus residential interpersonal therapy for social phobia: A randomized clinical trial. *Journal of Anxiety Disorders*, **22**, 991-1010.
- Erickson, T. M., Newman, M. G., Siebert, E. C., Carlile, J. A., Scarsella, G. M., & Abelson, J. L. (2016). Does Worrying Mean Caring Too Much? Interpersonal Prototypicality of Dimensional Worry Controlling for Social Anxiety and Depressive Symptoms. *Behavior Therapy*, **47**, 14-28.
- 福岡欣治・橋本 宰 (1995). 知覚されたソーシャル・サポートのストレス緩和効果におけるサポート源とサポート内容の影響——看護教員養成講習会の受講者を対象として—— 健康心理学研究, **8**, 1-11.
- 福岡欣治・橋本 宰 (1997). 大学生と成人における家族と友人の知覚されたソーシャル・サポートとそのストレス緩和効果 心理学研究, **68**, 403-409.
- Gilbert, P. (2000). The Relationship of Shame, Social Anxiety and Depression: The Role of the Evaluation of Social Rank. *Clinical Psychology and Psychotherapy*, **7**, 174-189.
- 林 潔・瀧本孝雄 (1991). Beck Depression Inventory (1978年版)の検討とDepressionとSelf-efficacyとの関連についての一考察 白梅学園短期大学紀要, **27**, 43-52.
- Horowitz, L. M., Alden, L. E., Wiggins, J. S., & Pincus, A. L. (2000). *IIP Inventory of Interpersonal Problems manual*. San Antonio, TX: Harcourt Assessment, Inc.
- 亀山晶子・坂本真士・岡 隆 (2008). サポートへの期待と受容のズレと、自尊心および抑うつとの関連——情緒的依頼心に着目して パーソナリティ研究, **17**, 95-97.
- 金井嘉宏・笹川智子・陳 峻雯・鈴木伸一・嶋田洋徳・坂野雄二 (2004). Social Phobia ScaleとSocial Interaction Anxiety Scale日本語版の開発 心身医学, **44**, 841-850.
- 金政祐司 (2008). 期待はずれがうみ落とせしもの——青年期の恋愛関係における期待はずれが関係内の感情経験と適応性に及ぼす影響—— 日本社会心理学会第49回大会発表論文集, 112-113.
- 勝谷紀子・坂本真士 (2017). 重要他者に対する再確認傾向と重要他者の行動および感情の推測との関連——第三者評定およびKJ法とテキストマイニングによる検討—— パーソナリティ研究, **26**, 173-176.
- 川崎直樹・小玉正博 (2007). 親和動機のある方から見た自己愛傾向と対人恐怖傾向 パーソナリティ研究, **15**, 301-312.
- 楢本知子・山崎勝之 (2008). 大学生における敵意と抑うつの関係に意識的防衛性が及ぼす影響 パーソナリティ研究, **16**, 141-148.
- Kendler, K. S., Karkowski, L. M., & Prescott, C. A. (1999). Causal Relationship Between Stressful Life Events and the Onset of Major Depression. *The American Journal of Psychiatry*, **156**, 837-841.
- Knobloch-Fedders, L. M., Critchfield, K. L., & Staab, E. M. (2017). Informative disagreements: Associations between relationship distress, depression, and discrepancy in interpersonal perception within couples. *Family process*, **56**, 459-475.
- Kraemer, H. C., & Blasey, C. M. (2004). Centring in regression analysis: A strategy to prevent errors in statistical inference. *International Journal of Methods in Psychiatric Research*, **13**, 141-151.
- Lipsitz, J. D., Gur, M., Vermes, D., Petkova, E., Cheng, J., Miller, N., Laino, J., Liebowitz, M. R., & Fyer, A. J. (2008). A randomized trial of interpersonal therapy versus supportive therapy for social anxiety disorder. *Depression and Anxiety*, **25**, 542-553.

- Lipsitz, J. D., & Markowitz, J. C. (2013). Mechanisms of change in interpersonal therapy (IPT). *Clinical Psychology Review*, **33**, 1134-1147.
- Mattick, R. P., & Carke, J. C. (1998). Development and validation of measures of social phobia scrutiny fear and social interaction anxiety. *Behaviour Research and Therapy*, **36**, 455-470.
- 松尾直博・新井邦二郎 (1998). 児童の対人不安傾向と公的自己意識, 対人的自己効力感との関係 教育心理学研究, **46**, 21-30.
- 村中昌紀・山川 樹・坂本真士 (2019). 対人過敏傾向・自己優先志向が対人ストレスイベント, 抑うつに及ぼす影響についての縦断的検討 パーソナリティ研究, **28**, 7-15.
- 水島広子 (2009). 対人関係療法でなおすうつ病——病気の理解から対処法, ケアのポイントまで—— 創元社.
- 永田彰子・岡本祐子 (2005). 重要な他者との関係を通して構築される関係性発達の検討 教育心理学研究, **53**, 331-343.
- 小塩真司 (2011). SPSSとAmosによる心理・調査データ解析 [第2版] ——因子分析・共分散構造分析まで—— 東京図書.
- Preacher, K. J., & Hayes, A. F. (2008). Asymptotic and resampling strategies for assessing and comparing indirect effects in multiple mediator models. *Behavior Research Methods*, **40**, 879-891.
- 笹川智子・金井嘉宏・村中泰子・鈴木伸一・嶋田洋徳・坂野雄二 (2004). 他者からの否定的評価に対する社会的不安測定尺度 (FNE) 短縮版作成の試み——項目反応理論による検討—— 行動療法研究, **30**, 87-98.
- 嶋 信宏 (1991). 大学生のソーシャルサポートネットワークの測定に関する一研究 教育心理学研究, **39**, 440-447.
- 下斗米淳 (2000). 友人関係の親密化過程における満足・不満足感及び葛藤の顕在化に関する研究——役割期待と遂行とのズレからの検討—— 実験社会心理学研究, **40**, 1-15.
- 白砂佐和子・平井洋子 (2005). 円環モデルによる対人関係上の問題の構造把握——対人問題インベントリー (IIP) を用いて—— パーソナリティ研究, **13**, 252-263.
- Sullivan, H. S. (1953). *The interpersonal theory of psychiatry*. New York: W. W. Norton.
- 高比良美詠子 (1998). 対人・達成領域別ライフイベント尺度 (大学生用) の作成と妥当性の検討 社会心理学研究, **14**, 12-24.
- 高坂康雄 (2010). 大学生における同性友人, 異性友人, 恋人に対する期待の比較 パーソナリティ研究, **18**, 140-151.
- 渡辺伸子・佐藤有耕 (2017). 重要他者に対する再確認傾向と役割期待および役割期待と遂行のズレの関連 筑波大学心理学研究, **53**, 103-111.
- Watson, D., & Friend, R. (1969). Measurement of social-evaluative anxiety. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **33**, 448-457.
- Weissman, M. M., Markowitz, J. C., & Klerman, G. L. (2000). *Comprehensive Guide to Interpersonal Psychotherapy*. New York: Basic Books, (水島広子 (訳)
- (2009). 対人関係療法総合ガイドブック 岩崎学術出版社).
- Weissman, M. M., Prusoff, B. A., Dimascio, A., Neu, C., Goklaney, M., & Klerman, G. L. (1979). The efficacy of drugs and psychotherapy in the treatment of acute depressive episodes. *The American Journal of Psychiatry*, **136**, 555-558.
- 山本淳子・田上不二夫 (2007). 思春期における評価懸念と承認欲求との関連 カウンセリング研究, **40**, 116-126.

(受稿: 2019.11.27; 受理: 2021.2.22)